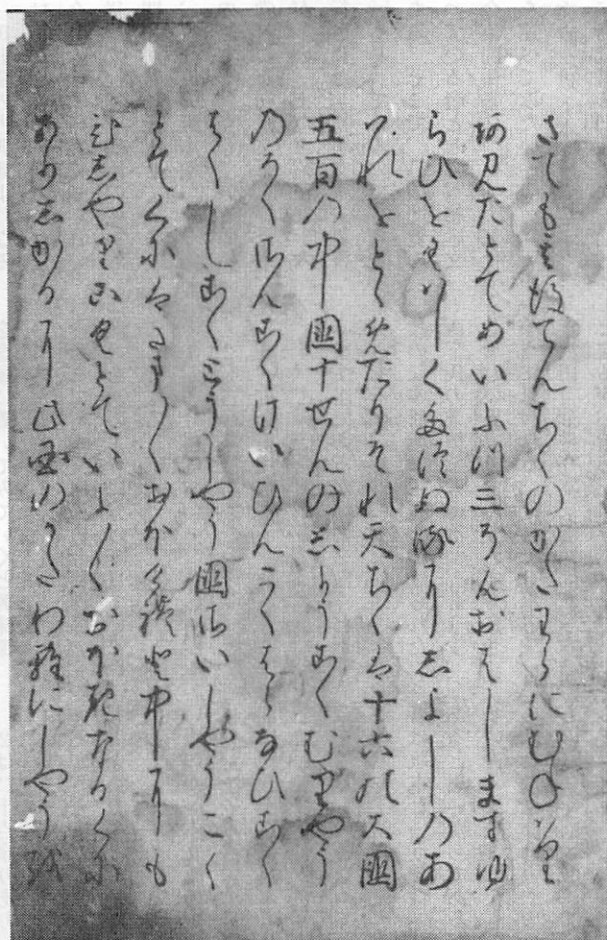
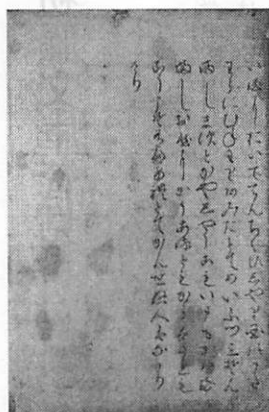


国文学研究資料館報

第56号

平成13年3月

編集・発行者 国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一六二〇
 郵便番号 一四二八五八五
 電話 〇三三七八五七一一
 FAX 〇三三七八五七〇五一
 URL <http://www.nijiac.jp/>
 印刷 株式会社三協社



『阿弥陀胸割』 卷頭 (右) 卷末 (左上) 挿絵 (左下) (12頁参照)

目次

初雁文庫管見	川上新一郎……2	平成12年度古典連続講演報告	参考室……13
平成13年度講演会・古典連続講演予告……3		第6回シンポジウム・コンピュータ国文学報告	
書物文化の視点からの研究事業(一) 松野陽一……4			データベース室……14
中国東北地方の日本古典籍について 入口敦志……5		第24回国際日本文学研究集会報告	情報資料室……15
新しい器 齋藤希史……8		特別共同利用研究員の受入れについて・	
ばあくれいざつきⅡ (これがエージェント?)		夏季セミナー受講生の募集……16	
原正一郎……9		彙報・人事異動・平成13年度共同研究……17	
新収和古書抄 平成12年……10		文庫紹介34:名古屋市蓬左文庫 堀川貴司……19	
新収資料紹介46:阿弥陀胸割 和田恭幸……12		平成13年度春・夏季学会……20	

初雁文庫管見

川上 新一郎

国文学研究資料館の所蔵する初雁文庫は周知のように、国文学者西下経一氏旧蔵の古典籍よりなる。西下氏は平安文学を専門とされ、特に古今集の伝本研究で知られている。従って、初雁文庫の蔵書も古今集関係が特に充実している。私自身、古今集の版本や、古今集注釈書の諸本を調査している関係から、常日ごろ初雁文庫を拝見する機会が多い。また、昭和五十六年に刊行された「初雁文庫主要書目解題」も具っているので、調査に便である。そこで、日頃閲覧の便に与っている者として、初雁文庫の古今集関係書について、気付いた点を述べてみたい。

初雁文庫（以下本文庫と称す）のように研究者の旧蔵書が一括して収蔵されている場合、一点一点の稀覯性や価値もさることながら、蔵書全体が研究者の学問と渾然一体となり、学問のあり方まで感じとれる点が貴重である。本文庫の場合も、「古今集の伝本の研究」

や「古今集校本」（滝沢貞夫氏と共著、没後刊行）等西下氏の業績を念頭に置いてみていくと興味深いものがある。

そこで、本文庫の古今集関係の蔵書を次のように分けて見ていくこととする。

- 1、古今集写本
- 2、古今集版本
- 3、古今集注釈書
- 4、古今伝受関係書

まず1であるが、切を除くと十三点あるが、意外に少ない。古今集の伝本研究に生涯を捧げられた西下氏の業績を考えると、もう少し珍しい異本を含んでいても良さそうに思われる。それでも承応三年沢田言珍書写本（解題は転写本とするが、承応三年写本としてよいであろう）は書写年代こそ新しいが、貞応元年十一月廿日書写の定家本で、しかも善本である。西下氏が著書で活用された意義ある本である。また、西下氏はいわゆる貞応本の中では頼阿本を代表的

なものと重視しておられたようで、頼阿本が二本あり、これも研究に活用されている。

なお、1に関して書写年代の気になる点を指摘すると、従来正和元年日朗書写本とされている本は、かなり時代の下る転写本であろう。

2は二十点余りあり、西下氏自身、戦前の論文で詳しく解説しているが、充実した収書である。私も古今集版本の調査に着手するに

当って、まず基本とさせていたただいたのが、本文庫の蔵書であった。また、国文学研究資料館は近年、別に約五十点に及ぶコレクションを加えており、この面で最大の収

蔵を誇るものとなっている。和歌や王朝物語を専攻している者は版本というといどこにでも

あると思いがちであるが、版種の多い古今集のようなものになると、めつたに見えない版や珍しい刊記のものも多く網羅的に調べようとすると案外やっかいである。また、版本の調査となると、同版異版や刷次の先後を決定する必要がある、写真より実物対査がよいのは言うまでもない。ずいぶん利用させて

いただいたこともあり、思い出がある。これに付随して指摘したい

のは、本文庫の版本には、しばしば西下氏によって写本との校合が書入れられていることである。当時版本はまだ勉強用の消耗品だった様子もうかがわれる。余談になるが、国会図書館所蔵の岡田希雄氏旧蔵書も、版本には（時には写本にも）岡田氏の校合や書人が丹念になされていて、その学問の広さと研鑽ぶりがうかがえる。

次に3と4であるが、この部門の収書は西下氏の先見の明を称えてもよいであろう。1や2については、当時関心を示す研究者は他にもあったが、3と4は昭和初期に関心を示した人はほとんどいない。3については、三条西公正氏や松田武夫氏もあるが、広く目配りされた点では、西下氏が突出している。現在では研究の盛んな分野であるが、本格的な研究は昭和四十年代の片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題」を待たねばならぬことを思えば、着目の早さがうかがえる。

さらに4に至っては、当時は全く顧みられなかったものである。西下氏も、著書、論文では伝受書にはほとんど言及しておらず、おそらく関心はあまりなかったので

はあるまいか。にもかかわらず、本文庫の伝受書は約五十点に及んでいる。

現在私の勤務している斯道文庫では、文庫の共同研究として、古今集注釈書のデータベース作りを進めているが、注釈書もさることながら、伝受書に至っては、その数の多さと相互関係の複雑さから、手の着けように困る状況である。また、伝受書は質より量の調査が必要とされる面もある。

その点、本文庫には伝受書がまとまって収蔵され、かつ解題も具わっており（項目が比較的丹念に拾ってあるのがある）、よき指針とすることが出来る。西下氏がこのように多くの伝受書を収集されたのは不思議なくらいであるが、あえて推測すれば、古今集に関するすべてを研究したいというお気持ちであったのではないかと「古今集校本」の頭注に見られる版本本文への関心と同じく、個々の資料の価値とは別箇に、古典としての古今集の文化そのものに関心を持たれての収書ではなかったのだろうか。

翻って、以上のような西下氏の古今集に対するさまざまな関心が

現在の古今集研究において順調に発展を遂げてきたと言えるかという、必ずしもそうとは言えない面もある。例えば、室町時代、貞応本の本文がどのようなであったか、あるいは、江戸時代、版本がどのくらい広く利用されていたか、と言った問題はおそらく西下氏の念頭にあったと思われるが、その後その点に関心を抱いた研究者はほとんどいなかった。

初雁文庫本に見られる西下氏の付箋や書入を見るにつけ、まだまだ本文庫蔵書を利用し、明らかにばならない問題があることに思いを致すものである。

* * * *

川上新一郎氏は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫助教授。中古和歌が御専門で、論文に「古今和歌集」版本諸版一覽（『斯道文庫論集』第十八輯、一九八二・三）、著書に『六条藤家歌学の研究』（汲古書院、一九九九年）などがあります。今回はそういった御専門のお立場から、当館所蔵の初雁文庫について、その資料的価値を中心に御執筆いただきました。

平成13年度春期公開講演会のお知らせ ジェンダーの生成

平成13年度春期公開講演会は、古典文学におけるジェンダーをテーマに行います。多数の皆様のご来聴をお待ち致します。定員は先着150名、聴講無料。なお申し込みは必要ありませんが、定員を超えた場合はお断りすることもありますのでご了承ください。

日時 5月18日（金） 午後1時半～5時

会場 国文学研究資料館大会議室

講師・演題

古今集の「ことば」の型一言語表象とジェンダー—

女が和歌を書くとき—女懐紙をめぐって—

源氏物語とジェンダー—和漢のはざまで—

千葉大学文学部助教授 近藤みゆき氏

早稲田大学文学部教授 兼築 信行氏

東京学芸大学助教授 河添 房江氏

平成13年度 古典連続講演のお知らせ

当館では、平成12年度より古典連続講演を開催しています。これは、特定の作品やテーマについて、連続的な講演を行うことにより、古典文学を更に深く理解するための催しです。公開講演会と同様に、一般の方々のみならず、学生・大学院生、及び専門研究者などを対象としています。

平成13年度は、西鶴をテーマに行います。講師は当館名誉教授長谷川強氏です。第1回は9月21日（金）です。以後の詳しい日程及び各回のテーマ等は未定ですが、全5回にわたって行います。場所は当館大会議室、時間は午後3時から4時半まで。申し込み制で、定員100名を予定しております。詳細が決り次第、ポスターやホームページなどでお知らせ致します。多数の方々のお申し込み・ご来聴をお待ち致します。

書物文化の視点からの研究事業(一)

松野陽一

既報の法人化、博士課程設置、立川移転の三問題は、それぞれに外側の動きと連動するもので区々ながら、このところかなり速度を上げて進み始めています。しかしながら今号では、基本事業に関して当面している問題について述べてみます。当然前記の三点と深く関わっているからです。

昨年の歳末近く、鹿児島で、在外日本古書籍調査についての、科研費プロジェクト数チームによる中間合同報告会がありました。米国議会図書館の未整理本、中国東北部大連・瀋陽等旧満鉄本、韓国・台湾の旧帝大本・総督府本等の蔵書概況や調査方法、ソウル大合巻七八〇点の良質な内容についての報告があり、国文研からは、開館以来の在外調査・収集の概要と韓国・台湾の複写収集の交渉状況を説明し、参加各プロジェクトに対しては成果の当館への収束、本文の複写収集への協力の依頼をしてきました。

当館の千二百年間にわたる日本

古書籍の悉皆調査・収集についてはいつも述べる通りですが、国内所在分については、全都道府県に配置した調査員制度によって国家事業としての方法が確立しています。ところが、海外所在本に関しては予算枠が無いことから、局部地域毎の科研費のプロジェクトの積み重ねに依拠するため、なかなか全体計画の組み立てができませんでした。諸研究者による個別的なプロジェクトの科研費申請が多発する現状もこのことと関係しているかと思えます。無論、国文研の統制などを主張するわけではありません。情報センターの役割りを完全に発揮するために、全体に目配りの効いた当館の計画が必要な時期が到来しているといつてよいでしょう。その点この正月の上海・浙江両図書館の調査は有益でした。北京と東北部以外の中国本土の所在情報への展望が開け、欧米・韓国・台湾に加えての主要地

点の計画が可能になったからです。どこにどれだけの本が所蔵されているか、その内どれだけのものが既に調査されているのか。情報が日本学研究者全体に共有される必要があります。

将来、「国書総目録」「古典籍総合目録」の在外版、それも所在目録だけではなく解題目録に収斂して、電子情報化すべきであると考えます。無論、本文そのものの提供にまで進める必要があります。

ケンブリッジ大学コーニッキ教授の作成されたヨーロッパ日本書籍解題目録のデータベースは当館に提供され、間もなく新訂版がインターネットのホームページを通じて発信されます。当館調査分も順次載せていく予定です。活字目録は著作権の問題がからむので困難なことが多いのですが、旧西ドイツ国内のクラフト目録、明治期作成で解題内容にやや問題を含んでいるものの、パリ国立図書館のデュレ目録などは(吉田幸一氏の補訂版がありますが)原語のまま載せてしまつて、新しい調査が進む毎に補訂していったらと考えています。近年刊行されたアメリカやイギリスの諸機関やルーバン・ラ・ヌーヴ等の近年の刊行書、現在進行中のチェスター・ビートイ図書館、韓国、中国諸機関のものなどは活字版が前提となっていますので、出版情報の整理、提供になるでしょうが、なるべく近い

当館は共同利用機関ですから、なるべく多くの研究者(無論、国文学者に限りません)が参加して成果を共有できるように願っています。そして、既に何度か書いたことですが、「文化財流出」の発想を捨ててほしいと思います。在外書籍は既にそれぞれの国の文化資源です。ぜひその国の研究者と共同調査、研究の形をとつて、それぞれの国の研究者による日本学研究の発展に寄与できるように配慮していただけたらと思います。これこそが「国際化」の本道なのではありますまいか。「他言語による解説の努力」同様に重視されるべきです。総研大博士課程には外国人研究者を歓迎し、徹底的な和本(日本漢文資料を含む。これについてはまた書きます)研究の専門家に、そして、その視点からの文学研究者に仕立て上げるつもりです。

(館長)

中国東北地方の日本古典籍について

入口 敦志

二〇〇〇年九月六日から九月十三日にかけて中国東北地方の瀋陽、長春二つの都市を訪問し書籍の調査をする機会を得た。両都市は共に一九四五年以前は旧満州（中国では「偽満州国」と称しているが、この報告では旧満州と呼ぶ）の政治の中心、南満州鉄道の拠点でありまた関東軍の拠点ともなった都市である。従って図書館や大学、病院など日本人のための施設も多く設けられていた土地でもあり、現在もその当時の建物がそのまま利用されている。書籍についても同じことが言え、旧満州時代そのままの蔵書を引き継いでいる図書館もあり、そのいくつかについては「遼寧省檔案館蔵日本文資料目録上下」などとして既に目録になっている。しかしその多くは旧満州時代の政治や経済に関する近代史の資料であり、文学の面でもその当時の現地で文学活動や蔵書を反映したもので、そういう意味では貴重なものであるが、日本の古

典籍はほとんどはいっていない。われわれの調査の目的は古典籍の所在を確認することであり、ここではそのときの訪問の様子を中心に報告したい。この調査は松原孝俊九州大学教授を中心として、中野三敏福岡大学教授、中山右尚鹿児島大学教授、それに入口の四人によっておこなわれたものである。最初の訪問地は遼寧省の省都瀋陽。旧満州時代には奉天と呼ばれていた都市である。九月七日はず中国医科大学の図書館を訪問。この大学は一九一四年に満州医科大学として創設されたもので、図書館にはその当時の書籍と雑誌約六〇〇〇種類を所蔵している。訪問した建物は当時のものであるが、現在新館を建設中とのこと。ここでは郭軍継副図書館長に話を聞くことができ、さらに館長の案内で書庫内を見ることができた。建物の外側だけでなく書庫や書架なども当時のままだという。その一角に線装本のみを集めた一室があ

った。ざっと見たところ点数は約二〇〇〇点。唐本が大半であるが、和刻本や一部日本人の著述も混じる。「聖濟要録」には和刻本の揃いとその元版の唐本があり、「本草図譜」や「救荒本草」の和刻本、「解体新書」や近世木活字の「コロリ病」などが散見された。これも概数であるが和刻本・日本人著述のものは全体の内二割程度か。郭副館長の話によると、戦後国家の命令によって古い書籍はいったん北京に移送された後、ふたたび一部が瀋陽に返却されたようである。

ここでこの報告でよく出てくる中国での書籍に関する用語を簡単に説明しておきたい。「古籍」とは清朝以前に著述された書物をさす。例えば岩波文庫の「論語」は古籍にあたる。古籍のうち糸で綴じられた本を線装本、さらにそのうち乾隆帝時代（在位一七三五～九五）以前に出版・写写されたものを「善本」と呼んでいる。この善本がほぼ日本での古典籍に相当すると考えてよいようであるが、乾隆帝末年は日本ではまだ寛政であり、日本の古典籍と中国での呼称との間にずれがあることに注意

されたい。善本のなかでさらに貴重なものをそれぞれの図書館で貴重書として指定している。これはそれぞれの図書館によって基準が異なるようであるが、ほぼ明以前つまり日本での室町以前のものがそれに相当することが多いようである。

その日の午後、日本総領事館に副領事の貴家尚哉氏を訪問し、その夜は馬興国氏にホテルのロビーで会って、中国東北地方での日本古典籍の所在についての情報を得ることができた。

八日は遼寧省立図書館へ。この図書館は一九四八年にハルビンで創設され、もと奉天図書館に所蔵されていた書籍を引き継いでいる。日本語の書籍は約九万冊、大半は満鉄関係のものであるが、そのなかに線装本が六〇〇種類一〇〇〇冊あるとのこと。ここでもその線装本を所蔵している線装本書庫に入り、直接線装本を見ることができた。六階のかなり広い部屋がその書庫で、ここに中国・朝鮮・日本の線装本を配架している。整理番号で0000001から0000281までが朝鮮の本、0000282から0001595までが日本の

本、001596からが中国の本である。これで行くと日本の線装本は一三・四四となる。さらにこれとは別に貴重本があと四〇〇点ほどあり、総計約一七〇〇点の日本古籍を所蔵しているとのことであったがその貴重本を見ることができなかった。遼寧省立図書館では目録のデータベース化が進んでおり、そのデータベースから日本の古籍を抽出して印刷したものを後日送付してもらい、現在松原氏が保管、科研の報告書に掲載の予定になっている。そのあと遼寧省の檔案館を訪問したが、ここは近代の史料だけであった。

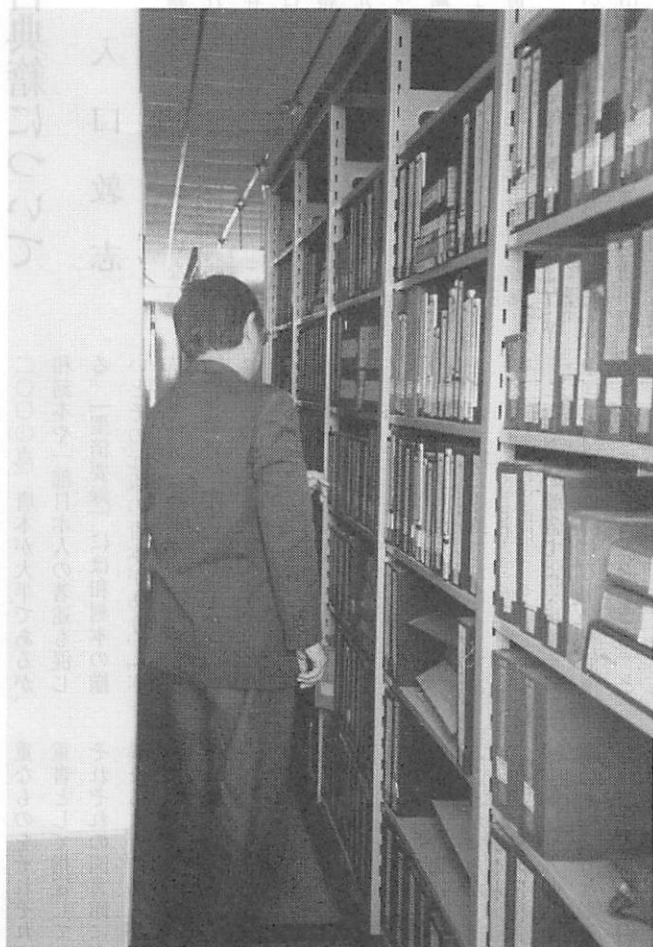
九日には瀋陽から旧満州国の首都新京であった長春へ鉄道にて移動。その日馬興国氏に紹介を受けた呂元明氏と夕食を共にし、旧満州時代の日本語書籍について話を聞くことができた。呂氏は長く長春の東北師範大学に勤め、旧満州時代の日本人の文学について研究を続けてきた人物である。

翌十一日には呂氏の案内で東北師範大学図書館を訪問。傅永生副館長と面会し、話を聞くことができた。この大学は一九四六年に東北大学として創建され、一九四

九年に現在の場所に移転。図書館には二〇〇万冊の蔵書があり、そのうち日本語の本は二万冊。それらは旧満州の建国大学や新京医科大学にあったものなどがここに入ったものという。線装本は約三二万冊、そのうち約二万五千冊が乾隆時代以前の善本であるが、そのほとんどは民間から集めたものであつて、旧満州時代の日本人の集書とは直接には関わらないらしい。

古籍については「東北師範大学古籍分類目録」五冊がある。副館長の話では善本の中に日本のものはないということであつた。この図書館も現在改築中であつたが、この旧満州時代の書籍の書庫を見ることができた。傅副館長の話のとおり明治以降の洋装本が中心で、線装本は古典保存会と稀書複製会の本のみ。ちなみにこの図書館は岩波書店と提携しており、岩波書

店で出版した書籍はすべて寄贈されている。また翌十二日にもう一度ここを訪問する機会があり、その折には十四室あるという線装本の所蔵室の一室に入ることが許された。確かに中国の本が大半であるが、例えば嘉永六年版の「甘雨亭叢書」があるなど和刻本も混じっている。見学できたのが叢書類の部屋であつたため和刻本は少なかったと思われるが、そのほかの



遼寧省立図書館古籍線装本書庫

部屋にはさらに和刻本があることが予想される。

時間は前後するが、十一日の午後は長春市立図書館と吉林省立図書館を訪問。

長春市立図書館は冊子になった目録はないようだが、「古籍目録」「日本文献目録」「偽満時期文献目録」「地方文献目録」などといったカード目録が完備する。ただし、あらましの調査では古い日本の文献はないようであった。

吉林省立図書館の古籍は約三六万冊。旧満州以来の日本語の書籍は約七万冊。呂氏の話しにあったものという。線装本収集は民間からの寄贈や北京の琉璃廠などの骨董街での購入によるものという。それら線装本を配架している特蔵組の書籍は閲覧に供していないとのことであるが、特別に書庫内を見学させてもらった。ここもほかの図書館と同様大半が中国の書籍。ただし、カードには例えば「子／245／5 三世相 二卷二冊 大本 寛永乙亥孟夏吉旦 中野市右衛門刊行」などという記載もあり、日本の古典籍があるようである。このカードの記述から見ると、

カードから日本のものを目録化することは可能であろう。

以上の日程で調査を終了し、十三日に大連経由で帰国。

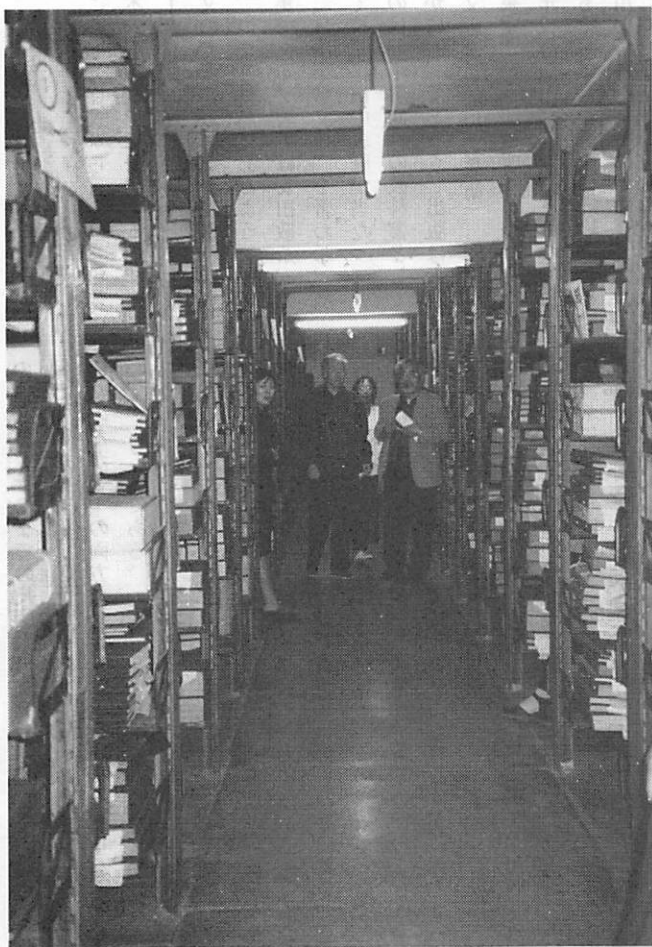
この折、海外所在の日本古典籍の調査を実施している、あるいはこれから行おうとしている科研などの調査情報を相互に共有する必要があるのではないかとということで、連絡会議を持つことを松原氏が発案。松原氏と入口が呼びかけ

人となって第一回の会議を二月

一八日に鹿児島で開催した。参加者は中国調査に同行した、中野、中山、松原各氏と呼びかけに応じた渡辺憲司立教大学教授、佐藤悟実践女子大学教授、丹羽謙治鹿児島大学助教授と九州大学大学院博士課程の勝又基氏、国文学研究資料館から松野陽一館長、王勇客員教授、和田恭幸助手と入口の総勢十一人。当初二時間程度の顔合わ

せの会の予定であったが、実際はそれに倍する時間を要し、熱のこもった会になったことをあわせて報告しておく。海外の調査が盛んになって来つつある今、効率の良い調査をするためにも各科研や調査団の情報を共有する必要があることを痛感した。

(研究情報部助手)



吉林省立図書館線装本書庫

新しい器

齋藤希史

昨年四月に文献資料部第四室に着任以来、あつという間の十ヶ月、当室の業務である明治文献の書誌を取り扱うことの難しさと面白さは、事前の心づもり以上だった。近世までの書物の様式があらゆる局面で変容を余儀なくされていく時代。ヨーロッパの印刷製本術の輸入が劇変をもたらしたことは言うまでもなく、さらに東アジアの交通が活況になったことが書物の流通や形式に与えた影響も大きい。

西洋技術の輸入といつても、整版和装がただちに活版洋装に入れ替わったわけではない。両者の併存がしばらく続いたというだけでなく、さまざまな様式の書物があり、これや世に現われたのが、明治初年という時代であった。そして書物の形式がさまざまであったこと、そこに記された言葉がさまざまであったことは、決して無縁ではない。そうした中で、明治十二年に出版された『記事論説文例』という本は、この時期の書物と言葉のありかたを示す恰好の例のように思える。

この本、様式から言えば、和装小本銅版印刷で二冊、上下併せて百丁余り、内容はというと、学校作文の参考書として編纂されたもの、つまり書名にあるように作文例集である。著者は安田敬齋、先に『日本小学文典』を著わし、加えて校閲に田中義廉が当たっているのは、小学向けの教科書としてのいかにも、であろう。出版は大坂の文栄堂（前川善兵衛）、銅版は響泉堂という印刷所、じつは明治十年代は銅版の時代でもあった。そもそも紙幣や図版の印刷のために用いられた銅版は、『詩語粹金』や『幼学便覧』など詩語検索のための袖珍本を作るのにも、細かい字で訓点や仮名を振るのに適当なことから盛んに利用され、ヨーロッパのそれとは違った展開を遂げていた。岸田吟香が上海で科挙受験用の銅版袖珍本を売って儲けるのは明治の出版文化が国の枠を越えた例でもある。『記事論説文例』のような作文書が銅版で刻されたのも、こうした漢文系袖珍本の流れにある。そして形式の明治らしきとともに注意を引くのは、この作文書、それまでの尺牘系の文例と文範系の文例——と私に名付けたのだが——の両方を一括りにしていることである。

尺牘系の文例というのは往來物に淵源するもので、明治になると教科書として『十二月帖』や『書牘』などが編まれ、手習いも兼ねて本文は草書もしくは行書で書かれた候文もしくは漢文。文範系は『古文辞類纂』など漢文の名文集を祖にもち、伝統的な文体分類を基礎に編まれたが、手習いより読本としての性格が強かったから本文は楷書であった。そもそも別々の流れにあったはずのこの二種の文例集を、『記事論説文例』は見ようによつてはかなり乱暴に一つにまとめた。すなわち上巻には「時候門」として季節に応じた尺牘文例を（さらに季節によらない「日用尺牘」を附して）収め、下巻には「記遊門」「記事門」「記職門」「慶賀門」「傷悼門」「論文門」「説文門」を立てて文範系の文例を分類収録している。さらに上下二段の頭書が設けられ、それぞれ「熟字」と「類語」を羅列するが、これは往來物を見慣れた目にはごく馴染みやすい。

そして、明治という世に用いられるべき文章を作るために必要な材料をとりあえず全部引くため一つにしたこの書物が採用した文体は、漢文訓読に近似した、当時は今体文などと呼ばれた漢字片仮名交りの文章であった。銅版ゆえに細かい振り仮名も自由自在、新しい器に新しい言葉が盛られた。この言葉をレッスンすることで、新しい世のことはすべて書きつけるはずと訴えているかのようだ。

半年余りで続編「上等 記事論説文例」が出版され、さらに三編『記事論説文例 附録』が続いたのを見れば、この本がどれだけ売れたか想像はつくし、何より同型同様の書物が柳の下泥鰌よろしく続々出版されたのは、こうした作文書が出版上のひとつのジャンルとして成立したことを示す。いまは埃まみれで古書肆の片隅にあるような本だけれども、埃を払って繕えば、綺麗に棚に飾られた希観本にもまして、時代の息吹は伝わってくる。明治文献を調査収集する喜びを感じる瞬間、とはいささか身びいきに過ぎるかもしれないけれども、（文献資料部助教）

ばあくれいざつきⅡ (これがエージェント?)

原 正一郎

自分の場合は特にそうなのだが、組織のシステムというか運営法を理解することが殊の外苦手である。大学院から学術情報センターを経由して国文学研究資料館に奉職して十年が過ぎようとしているが、何かをするにつけ未だに非常識なことをやらかしているらしく、事務方との摩擦が絶えない。そんな人間が他国の大学組織について述べることは不可能に近い。それでも書いてみようと思ったのは、彼らの差が大きいと感じたからである。というわけで、これから書くことは垣間見た事柄のごく一部であり、しかも英語が未熟なゆえの聞き違いや勝手な思い込みが相当あると思うので、文面のままには受け取らないでいただきたい。

一応コンピュータが専門ということなので、コンピュータ管理系の組織については関心があつた。ましてパークレイといえ、UNIXの業界では泣く子も黙る「BSD: Berkeley Software Distri-

buton」のパークレイである。そこで驚いたのは、日本では計算機センターに相当する部門に研究者がいないと言うことである。日本を代表する東京大学の大規模計算機センター(最近、組織替えをした)にしても、超小振りな国文学研究資料館の情報処理室にしても、研究者が小間使いよろしく働き回っている。それに対してパークレイの計算機センターの大部分は、日本で言えば技官で構成されている。技官と言っても優秀な専門家集団であり、その辺の助手以上の知識と技量を備えている。このような集団が基幹システムやネットワークの設計から管理運営、教育用ソフトウェアの開発、コンピュータ教育などに従事している。「研究者はコンピュータのお守りなどせずに研究するのが仕事でしょ?」と言われてしまった。

では、司書は教師と同じ扱いだそうである。実際にインタビュしてみると、司書の知識と自信には敬服してしまう。思い返してみれば、MARC (Machine Readable Catalogue) 目録規則 (AACR: Anglo-American Cataloging Rulesなど)、あるいは情報処理室が導入しようとしているZ39.50にしても、基本的には彼(女)らの努力の成果である。その図書館であるが、相変わらずデジタルライブラリは流行である。トビックを二つ挙げると、一つは電子アーカイブである。パークレイではアーカイブデータの記述法としてEAD (Encoded Archival Description) を採用したとのことである。EADそのものはパークレイが発祥の地であるから当然と言えば当然なのであるが、他への影響は大きいと言える。ちなみに、史料館ではESAD (G) の導入を決めたようであるが、今後の展開について多少は気になるところである。二つ目はCDL (California Digital Library) である。分かりにくい話であるが、パークレイは、ロサンゼルス校 (UCLA) など他の八つのキャンパスとともにUC Systems (つまりカリフォルニア大学) を構成している。UC Systemsはカリフォルニア州の州立大学であるから、ある種の公的サービスを行うことが求められているらしい。この辺が私立のスタンフォード大学との違いであるとも言えよう(これを足枷と考えている者もいるらしい)。このCDLであるが、UC Systemsの図書館システムを基盤として、州内の公立図書館などを包含したサービスの実現を目的としている。まあ、裏ではいろいろと問題も抱えているようであるが、このダイナミズムはいつもながら羨ましいと感じた次第である。

テナンコース (tenure course) に乗っていないと身分にも影響するので、ことは重大である。そのため、(全員とは言わないまでも) 研究者の頭から予算のことが消えることはなく、申請書、デモ用プログラム、データを入れたパソコンを手放すことができないと言うことになる。「金、金……」というのも考えものであるが、これが来るべきエージェントの一つの姿ではあると感じた次第である。もっとも、競争原理があまり働かない日本の大学環境も不自然ではあるが……。何につけても闘争心丸出しのアメリカと、何でも平準化を求めるたがる日本の中間がベストに思えるのは、浅はかであろうか？

浅はかしいでもう一つ。タイ

新収和古書抄

平成一二年

法華五部九卷書 卷子本一軸

表紙ナシ、巻頭痛みあり。斐紙、紙高二九・二釐、全長約一〇メートル。一行一九字内外、部分的に訓点を施す(本文同筆、墨点)。本奥書(仮託)「本云/大治元年

トルは忘れたが、教授の棚に予算関係の分厚いマニュアルがあった。ちよつと読んでみたが、殆どお呪いのような内容でさっぱり理解できなかつた。パークレイの先生達はこのようなマニュアルを見ながら書類を書いたり申請しているのであろうか？ ひるがえつて、自助努力を要請されるエージェント化が実施されるとき、国文学研究資料館にもこのようなマニュアルの類は用意されているのだろうか？ 「このマニュアルを翻訳したら一儲けできるんじゃないか？」と言われて真剣に考えてしまったのは、やはり浅はかだったのか、それともアメリカのマネタリズムに感染してしまったためなのか。(研究情報部助教授)

られる最古写本。落合博志「資料紹介「法華五部九卷書」」(『芸能史研究』一〇九、一九九〇・四)に「猪熊家蔵本」として言及される本である。

宋雅千首 大本合一冊

もと六卷(四季・恋・雜)六冊を合冊。第一冊の藍色布目型押原表紙を用いる。二七・一×一七・八釐、原題簽中央「千題倭歌集(春)」。毎半葉九行、和歌一行書き、柱ナシ、丁付ウラノド下部。わずかに虫損、早印。本奥書「道千題千首和歌者飛鳥井垂相詠藻也/凡一秩(六帖)幽齋以印(ママ)本無一字差謬令/繕写畢為証本乎/元和五年己未孟春藤惺窩(在判)」(◇内小字右ヨセ)、刊記「元祿五年壬申仲夏日/雛陽二

条晴明町/井筒屋六兵衛刊行」。国書総目録には元祿一〇年刊本を載せるが、該書は未載。内容は応永二七年来飛鳥井雅縁(本書春部巻頭には作者を「宋雅」とするが誤り)が詠じた千首和歌である。

長恨歌 大本一冊

(室町後期)写。二四・七×一八・〇釐、紙釘装(四眼)、厚手

斐紙両面書き。本文共紙原表紙(但しごく一部布が残っており、元はこの上に布を貼付してあったか)に左肩打付墨書「長恨歌」(別筆)。毎半葉五行、有界、一行一〇字前後。本文八丁半のうち、前半には詳しい訓点(本文同筆、墨点)あり。識語(別筆)「右安斎翁了順之書沢也」。印記「瘦松園/文庫章」(黒田亮)。本文は旧鈔本系ではなく、「古文真宝前集」所収のものに依ったか。

〔幸若舞曲會我物集〕

大本一帖

〔室町末江戸初〕写、列帖装、二五・〇×一七・四釐。厚手斐摺交漉紙、全九三丁。毎半葉九行、一行二三字前後、一筆。稀に同筆の異文注記、同筆・別筆のフリガナがあるが、「小袖會我」前半を除き節付はない。後補表紙に打付朱書「珍」「古写/幸若音曲/會我物集」、表見返に識語「無題ノ幸若舞曲飯二會我物集ト名付ク。収ムル所、元服會我・和田酒盛・小袖乞・暮尽・夜討會我・十番切。舞曲ノ首尾ニ考フベキ所アリテ、曲ノ独立セル由縁形容ヲ思フニ足ル。幸若舞曲果シテ何時ノ頃ニカ三十曲ヲ越エタルヲ。昭和六稔

春 英二識」(句説点等を補う)。共に瀧田英二氏の筆であろう。「幕尽」は通行の「夜討會我」の前半。末尾「十番切」は後半を欠く。笹野堅「幸若舞曲集」序説一五八頁に書影あり。

たむらのさうし 大本二冊

無刊記、(寛永)頃刊、覆古活字整版。一部裏打ち等の補修や化粧裁ちがあるが、原栗皮表紙を存し、原題箋も半分ほど残る。保存良、やや後印。每半葉一〇行、匡郭ナシ、字高二〇・四厘、柱「田村上(下)」。「丁付」。挿絵一五面。「室町時代物語集」第一所収の翻刻の底本(小田隆二氏蔵本。解題には東京大学国文学研究室本と同じという)と同版か。古活字版の面影を伝えるゆったりとした字面と、古雅な挿絵が好ましい。

版本 雪玉集 大本一八冊

寛文一〇年版の書肆名を削除した後刷本。最終冊見返しに「吉田四郎右衛門」の名が見られる。本文の行間及び頭部に本多若狭守・永井十郎左衛門・松井幸隆各所持本との比較と「尊翁」原安適の意見が書き込まれる。元禄期江戸歌

壇において雪玉集がいかに深い関心をもって扱われていたかを示す好箇の資料。多少の虫喰いはあるが本文等の読解に支障はない善本である。

一本草 美濃版写本一冊

大久保紫香、吉田幸一旧蔵本。柳亭種彦の書き入れがある。現存写本三種のうち、吉田幸一氏が未刊文芸資料第三期5「茶屋諸分調方記」付、祢宜町往来・国町の沙汰」の解題で「二」とされた本。内容は「一本草」は野郎歌舞伎の役者花村幸助を讀したものの。付載されている「国町の沙汰」は、役者柴川類之助が登場する仮名字子。

蕪村書簡(几童宛) 一軸

大坂滞在中の几童に宛てた安永九年八月頃と推定される書簡。女流作者うめのことと刷り物に関する連絡、英子(小川吉太郎)・慶子(中村富十郎)など芝居の役者に関する珍しい噂など、三十行の文の中に情報豊かである。「連歌俳諧研究」九八号(二〇〇〇年発行)「蕪村書簡六通の紹介と検討」(上野洋三稿)に写真版と本文翻刻および考証がある。

和歌問答・和歌大意 大本三冊

(近世末期)写。二六・六×一九・〇厘、縹色蜀江錦艶出原表紙。外題ナシ、内題「和歌問答上巻(下巻)」「和歌の大意の事」。每半葉九行、一行二六字内外、一筆。ふりがなを多用、謹直な字体の精写本。保存良。「和歌問答」上巻には別筆にて朱訂が入っている。ともに江戸後期の歌人石塚寂翁の著作で、前者は師である日野資枝からの問書である。後者は「近世歌学集成」(中)に、刈谷図書館本の翻刻がある。

手拭合 中本一冊

縹色地「寿」字型押散らし原表紙、左肩に原題箋(三分の一ほど剥落)「□なくひあはせ」。上部に水損あるも保存良、初刷。色刷りも鮮やかに残っている。印記「南木藏書」(南木芳太郎)「をばま」(小汀利得)。「小紋裁」「小紋新法」などと並ぶ山東京伝の見立絵本の傑作で、手拭いの柄を用いて様々なパロディを仕立てている。「京伝鼻」が初めて登場したことで知られる。伝本稀で、戦前に稀書複製会叢書の複製(底本、林若樹蔵本)がある。

潮干のつと 大本一帖

原装藍色無地表紙に金泥にて姫松と草を描く。原題簽存。ノドに小虫あり。画帖仕立て。早印。朱楽菅江編、葛屋重三郎刊。貝を題材にした狂歌三六首に、喜多川歌麿が精緻な絵を添えたもので、空刷、雲英刷、銀砂子散らし、金箔押しなどの技法を用いた豪華な狂歌絵本。残念ながら一丁欠けており、全九丁。なお、本文狂歌の箇所金泥・金砂子を施したものがあるといふ(「日本古典文学大辞典」鈴木重三氏の解説)が、本書にはない。

役者見立東海道五十三駅 折本一帖

一陽斎豊国画。目録一枚と大判錦絵六十二枚を折本形態に貼ったもの。五十三次の地名に因んだ人物が、当時の歌舞伎役者の似顔で描かれている。「役者見立東海道五十三駅」(嘉永五年)の揃い物五十一図(四図欠)、続編十一図所収。「役者東海道」は国立劇場の「芝居版画等図録Ⅳ」に正編二十八図、続編十四図が載るが、本作品によって、「役者東海道」正編の実態が、ほぼ把握される。

古活字刊本『阿弥陀胸割』

『阿弥陀胸割』(「むねわり」とも)は、古浄瑠璃・説経の有名な作品である。従来、本作品の現存最古の伝本は、慶安四年草紙屋賀兵衛刊本(天理大学附属天理図書館所蔵)とされていた。しかし、信多純一氏の精緻な研究(『阿弥陀胸割』復原考・昭和48年発行『近世文学―作家と作品』所収)に解明される如く、件の本文は到底最古の形態とは認められ得ないものであった。

この度当館の収蔵となった古活字刊本『阿弥陀胸割』(大本一冊)は、正保四年を遡る、本作品現存最古の新出伝本に相当する。近年、古書籍商では異口同音に「古書払底の罫」と云うのが、半ばお約束の口上。平かなの古活字刊本で、しかも有名な作品の未知なる一本が発見されることなど、極稀のケースである。よって、一作品の伝本発見に止まらず、演劇、書誌学、近世初期文学一般など、多方面の研究に資すべき重要資料の新出といつてよい。

さて、当該の古活字刊本『阿弥陀胸割』は、無刊記本(発行年や発行者名を明記しない刊本)である。差し詰め、一体いつ頃刊行されたのか、が当面の関心事となるうか。と、いうより書誌学研究の観点では、その刊年、先行の刊本との関連性において、際立った重要性を発現するものようである。

まず、本書は、古活字版である。古活字版に関する詳細は、以前に当館文献資料部の特定研究をもとに作成した『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店発行)のご参照を願うこととし、兎も角、古活字版であるから、近世初期(慶長・寛永頃)に限定される。次に、同じ活字を使用した他の刊本を探すことにより、活字の使用時期がある程度限定される。そこで抽出されるのが、慶長中古活字刊本『浄瑠璃十二段草子』(東京大学総合図書館所蔵)と慶長元和中刊本『花鳥風月』(国立国会図書館所蔵)の二書である。その他は、さして積極的に発見できる類ではない。

件の作業過程において、何れかに刊記が有れば、より具体的に使用年限が判明するのであるが、三書共に無刊記本である。ただし、本書の活字は、極めて特徴のある、大形の平かな連続活字で、寛永年間の有刊記本には、現在のところ全く類例を見ないものである。そこで、本書の刊年は、慶長末年から元和年間(慶長元和中刊)と判断できる。

中ん就く、慶長期の平かな古活字刊本といえば、嵯峨本『伊勢物語』が想起されよう。嵯峨本とは、本阿弥光悦を指導者として、嵯峨の地で開版された刊本の呼称である。現在では、この定義にも学術的疑問点が提示されるが、兎も角、慶長年間に刊行を見る、世界にも稀な美術的価値の高い印刷物である。また、慶長期には、平仮名の文学作品を刊本とした事例は極稀で、嵯峨本『伊勢物語』の刊行は、近世期の国書出版において、記念碑的な重要性をもつ。

前記の『浄瑠璃十二段草子』は、

その挿絵に、件の嵯峨本『伊勢物語』の強い影響が認められ、料紙もまた色代わり料紙である。ゆえに、書誌学的には、嵯峨本『伊勢物語』の刊行に触発された追隨的出版物、として位置付けられる。そこで、同種の活字を使用する古活字刊本『阿弥陀胸割』『花鳥風月』にもまた、これと一連の出版物(作品の内容とは全く関係ない)としての括り方が可能となる。

ところで、古活字刊本『阿弥陀胸割』は、内容の切れ目ごとに空白を設けている。この箇所を数え、合計十二段。また、登場する阿弥陀如来も、一光三尊の如来と記す。一光三尊といえば、信州善光寺を本元として、甲州、はたまた専修寺の天拝一光三尊仏に代表される御分身。説話文学の見地からも興味は尽きないが、字教制限の尽きたところで、解説を終了したい。

(文献資料部助手・和田恭幸)

平成十二年度古典連続講演報告

岩佐美代子の語る『源氏物語』(全五回)

平成十二年度に、当館の新たな試みとして古典連続講演(全五回)を行った。当館の公開講演会は一回限りの講演であるため、内容的にも時間的にも制約があることから、一人もしくは数人の講師による連続的な講演を行い、深く作品を読んだり、あるテーマについて考えたりする機会としたいと考え、古典連続講演の開催を計画した。

今回は「源氏物語」をテーマとした。講師の鶴見大学名誉教授岩佐美代子氏は、京極派の和歌を中心に、中世と中古の和歌・日記文学研究において著名であるが、照宮成子内親王にお仕えした「女房」としての視点からの著作も多い。平成十年十二月の当館公開講演会(於宇治市)において「宇治の中君—紫式部の人物造型—」という講演があり、多大な反響があった(この講演は古典講演シリーズ5「伊勢と源氏—物語本文の受容—」として臨川書店から刊行されている)。氏に更に深く広く「源氏物語」を語って頂けないかということから、特にお願ひし、今回の企

画が実現した。五回の日時と内容は次の通り。

- 平成十二年
- ①五月一九日 皇女の系譜—藤壺・秋好中宮・女三宮—
 - ②九月二九日 衣裳の描法—その役割と効果—
 - ③十一月二四日 妻三態—葵上・紫上・花散里—
 - 平成十三年
 - ④一月二六日



岩佐美代子氏

夕霧の巻鑑賞—普通人の物語—

⑤三月一六日

愛読する人々—鎌倉後期の享受—
申し込み制、応募多数の場合は抽選とし、定員は当初百二十名を予定していたが、文字通り応募が殺到し、二百名まで定員を増やしても、非常に多くの方々に申し訳ない結果となった。お越し頂くことができなかった方々には、深くお詫び申し上げます。

会場は毎回熱心な聴衆で埋め尽くされ、関西はもとより、北海道や九州からも来聴する方々があつ



古典連続講演会場

た。岩佐氏の講演は、本文を深く読み解きつつ、常に新たな知見と解釈、視点を示すもので、各回ごとに独立した結論を示す学術的なものでありながら、「源氏物語」の魅力をこまやかに語っていて、刺激的で充実した、贅沢な時間であったと思う。会場にはいつも静かな感動が渦巻いていて、一時間半は短く感じられた。

この五回の講演の内容は、岩波書店「文学」に連載される。

(参考室・田淵句美子)

第六回 シンポジウム・ コンピュータ国文学 報告

国文学研究資料館では、12月8日(金)に、第六回の標記シンポジウムを開催した。

今年は、20世紀最後にあたる平成11・12年度限定で国文学研究資料館がネットワーク上に公開している《日本古典文学本文データベース》を取り上げた。この、岩波旧古典文学大系全百巻のデータベースを、各時代の研究者四人が実際に活用した上での研究発表をした。その後のパネルディスカッションでは、21世紀の文学研究とコンピュータ環境を視野に入れて、この《日本古典文学本文データベース》の評価と、今後のデータベースの可能性を考え、会場からの質疑を交えての活発な討議がなされた。

なお、午前午後すべての講演とディスカッションは、インターネットでライブ中継した。会場に来られない方々にも参加していただき、電子メールで寄せられた意見を、そのまま会場で紹介することができた。

二十一世紀の文学研究とコンピュータ―日本古典文学本文データベースの評価を通して―

基調講演

「日本古典文学本文データベース」
安永尚志(国文学研究資料館)

講演

・上代…古事記・日本書紀

・瀬間正之(上智大学)

・中古…枕草子・源氏物語

・中村一夫(関西大学)

・中世…今昔物語集

・渡辺信和(同朋大学仏教文化研究所)

・近世…近世散文

・木越治(金沢大学)

パネル討論

・瀬間正之・中村一夫・

・渡辺信和・木越治

・司会 伊藤鉄也・相田満

(国文学研究資料館)

(データベース室・伊藤鉄也)



第24回国際日本文学研究集会報告

平成一二年一月一六日(木)

・一七日(金)の両日、「境界と日本文学―画像と言語表現―」というテーマで開催され、様々な時代・ジャンルにわたる熱のこもった発表が続いた。参加者は一二二名(うち海外から四一名)であった。内容は以下の通り。

*第1セッション: 説話・物語の画像化

浦島伝説における画像の諸問題

林晃平(苫小牧駒澤大学)

説経節『小栗判官』の成立再考

松尾剛次(山形大学)

画像は千の言葉に匹敵するか

―漫画にみる『源氏物語』―

Lynn K. Miyake (ボモナ大学)

*第2セッション: 人物画の世界

フリーア美術館蔵高尾太夫図について

鈴木淳(国文学研究資料館)

異人種への視線

―近代日本の人種観の誕生まで―

齊藤愛(日本学術振興会)

入宋僧の影像と真蹟

―旅行記『参天台五台山記』を史料として―

王麗萍(大谷大学大学院)

百人一首の絵画化―享受と解釈―

Joshua S. Mostow (ブリティッシュ・コロンビア大学)

*第3セッション: 越境する画像

雑誌メディア・小説・映画の交渉

に見る(他者)の変容

―大江健三郎の『叫び声』から

大島渚の『絞死刑』に至るまで―

趙美京(筑波大学大学院)

矢野龍溪『経国美談』の空間特質

表世晩(神戸大学大学院)

所謂「人生道中図」とその変容

肥尾尚子(お茶の水女子大学大学院)

学院)

挿絵の独立、先行性

―黄表紙のケース―

Haruko Iwasaki (カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校)

*公開講演

「行燈の中に座っていた狐」など

―文学と美術のはざま―

小池正胤(東京学芸大学名誉教授)

授)

中国資料に描かれた日本人像

―遣唐使人の容貌を中心に―

王勇(浙江大学/国文学研究資料館客員教授)

料館客員教授)

これらの内容を収めた会議録は三月刊行予定。また、第二回のテーマは「造形と日本文学」である。参加要領は当館ホームページ(<http://www.nijl.ac.jp>)を御覧いただきたい。

(情報資料室・堀川貴司)



特別共同利用研究員(大学院生)の受入れについて

国文学研究資料館では、当館での研究及び研究指導を希望する特別共同利用研究員(大学院生)を募集しております。

詳細につきましては、昨年十二月中旬に各大学院へ送付した「特別共同利用研究員受入要項」をご覧ください。又は、当庶務課共同利用係(電話〇三―三七八五―七―三三―内線二一〇・二一一)に直接ご請求ください。

概要

- ・ 受入人数 十名程度
- ・ 受入対象 大学院の修士課程又は博士課程に在学し、日本文学及び日本史学等を専攻し、文献学、書誌学、史料管理学等に関する分野に興味を持つ学生。
- ・ 授業料 無料
- ・ 受入決定 当館大学院教育協力委員において審査の上決定し、その結果を所属する大学院の研究科長及び本人に通知する。
- ・ 研究課題・指導教官(予定)
- ・ 平安私家集・私撰集の研究 新藤協三
- ・ コンピュータを使った古典研究

- ・ 中村康夫
- ・ 「源氏物語」の異本と異文に関する研究 伊藤鉄也
- ・ 中古・中世の和歌文学の研究 浅田 徹
- ・ 和歌文学の文化史的研究 松村雄二

- ・ 五山禅林における中国詩の受容に関する研究 堀川貴司
- ・ 中世学問史研究 山崎 誠
- ・ 中世文学の研究、特に能に関する研究 落合博志
- ・ 中世歌人とその周辺に関する研究 田淵句美子
- ・ 江戸初期の文学と出版文化 岡 雅彦

- ・ 「奥の細道」本文校訂の試み 上野洋三
- ・ 近世学芸の研究、特に歌文に関する研究 鈴木 淳
- ・ 近世文学の研究、特に歌舞伎・浄瑠璃の研究 武井協三
- ・ 草双紙における芸能受容の研究 山下則子
- ・ 近代文学の研究 谷川恵一
- ・ 近代東アジアにおける漢語・漢文・漢詩 齋藤希史

情報国文学の研究

- ・ 安永尚志・原正一郎
- ・ 文学情報処理 野本忠司
- ・ 近世史料の研究 高木俊輔
- ・ 近現代史料の研究 鈴江英一
- ・ 近代民間史料の研究 丑木幸男
- ・ 記録史料学の研究 安藤正人
- ・ 近世史料学の研究 山田哲好

幕府・藩の組織構造と文書群の史料学的研究

- ・ 大友一雄
- ・ 近世都市史の研究 渡辺浩一
- ・ 史料管理学の研究 高木俊輔
- ・ 鈴江英一・丑木幸男
- ・ 安藤正人・山田哲好
- ・ 大友一雄・渡辺浩一

夏季セミナー受講生の募集

当館では、国文学と日本史学を専攻する大学院生(修士課程・博士課程)を対象として、毎年夏に「原典講読セミナー」を開講している。

これは一年をサイクルとする特別共同利用研究員(大学院生)の受入れとは別で短期間のセミナーである。

日程等についてはまだ決定されていないが、今年も八月下旬に開講の予定である。募集人員は約十五名、応募者が多数の場合は、当館で選考する。受講料は無料(講義資料については、実費徴収)。

講義の内容は未定であるが、担当者、次の予定である。

- ・ 武井協三教授(近世文学)
- ・ 大高洋司教授(近世文学)
- ・ 鈴江英一教授(日本史学)

このセミナーは、平成五年より開講し、受講生から毎回好評を得ている。研究における視野の拡大と、深化をはかる貴重な機会として、ふるって応募していただきたい。

なお、このセミナーの講義は、「原典講読セミナー」のシリーズとして、平凡社・臨川書店より順次刊行されている。

セミナーについての問い合わせ先は、当館管理部庶務課共同利用係(〇三―三七八五―七―三三―内線二一〇・二一一)。

彙報

・委員会日誌・

平成12年

9月8日 大学院設置準備委員会

9月12日 図書選定小委員会

9月13日 原本テキストデータ

ベース監修員会議

9月22日 原本テキストデータ

ベース委員会

10月5日 情報システム専門委員会

10月26日 館報紀要委員会

11月7日 図書選定小委員会

11月9日 文献資料調査員会議

(近畿地区)

11月14日 館報紀要委員会

11月16日 大学院教育協力委員会

11月20日 国際日本文学研究集

11月21日 共同研究委員会

11月28日 移転問題検討委員会

12月1日 独法化問題検討委員会

古典籍総合目録

委員会

平成13年

12月5日 図書選定小委員会

1月15日 国際日本文学研究集

1月16日 原本テキストデータ

ベース委員会

1月23日 共同研究委員会

1月25日 ホームページ委員会

2月1日 移転問題検討委員会

2月1日 図書選定小委員会

2月14日 情報システム専門委員会

2月16日 国文学文献資料収集

計画委員会

・運営協議会の開催について・

平成十二年度第二回運営協議員

会が平成十二年九月一日(木)に

開催され、国文学研究資料館長候

補者の推薦、管理運営の概況等につ

いて協議が行われた。

第三回運営協議員会が平成十二

年十月二十四日(火)に開催され、

国文学研究資料館長候補者の選定

等について協議が行われた。

第四回運営協議員会が平成十二

年十一月十七日(金)に開催され、
教官人事等について協議が行われ
た。

・評議員会の開催について・

平成十二年度第二回評議員会が

平成十二年十二月十一日(月)に

開催され、国文学研究資料館長候

補者の選考等について協議が行わ

れた。

・外国出張・

松野 陽一

渡航先 韓国

目的 韓国を中心とした旧

植民地所在の日本典

籍に関する調査

期 間 平成12年9月4日

入口 敦志

渡航先 中国

目的 東北師範大学中央図

書館所蔵・日本語古

典籍調査

期 間 平成12年9月6日

松野 陽一

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

書籍に関する調査

期 間 平成12年9月17日

堀川 貴司・入口 敦志

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

期 間 平成12年9月21日

期 間 平成12年9月17日

安藤 正人

渡航先 スペイン

目的 第二次世界大戦期ア

期 間 平成12年9月20日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 香港

目的 国際計算言語学会議

期 間 平成12年10月2日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 イタリア、フランス

目的 日本古典文学作品電

期 間 平成12年9月27日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 韓国

目的 韓国を中心とした旧

期 間 平成12年9月27日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 中国

目的 東北師範大学中央図

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 韓国

目的 韓国を中心とした旧

期 間 平成12年9月27日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 中国

目的 東北師範大学中央図

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 中国

目的 東北師範大学中央図

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 中国

目的 東北師範大学中央図

期 間 平成12年9月28日

期 間 平成12年9月17日

渡航先 台湾

目的 旧植民地所在の日本

期 間 平成12年9月28日

上野 洋三	平成12年10月9日	岡 雅彦	渡航先 フランス
渡航先 目的	フランス	渡航先 目的	在外日本古典籍資料 (フランス) の調査
目的	在フランス日本文学資料の目録化のための基礎調査	目的	平成13年1月25日
期 間	平成12年10月10日	期 間	平成13年2月1日
松野 陽一	平成12年10月31日	齋藤 希史・堀川 貴司	谷川 恵一
渡航先 目的	韓国	渡航先 目的	渡航先 フランス
目的	韓国を中心とした旧植民地所在の日本典籍に関する調査	目的	東洋言語文化研究所 図書館所蔵日本典籍資料の調査
期 間	平成12年10月15日	期 間	平成13年1月25日
安永 尚志	平成12年10月18日	久保木秀夫	平成13年2月1日
渡航先 目的	チェコ、ハンガリー、オーストリア、フランス	渡航先 目的	渡航先 フランス
目的	古典テキストの電子化状況、利用形態についての調査研究	渡航先 目的	在外日本古典籍資料 (フランス) の調査
期 間	平成12年10月31日	期 間	平成13年2月4日
原 正一郎	平成12年11月12日	原 正一郎	平成13年2月10日
渡航先 目的	アメリカ	渡航先 目的	人事異動 (平成12年9月、平成13年2月)
目的	国文学デジタル資料館システムの国際共同構築と利用に関する研究他	渡航先 目的	○平成12年10月1日付 採用
期 間	平成13年1月5日	期 間	土屋 啓一 (管理部会計課用度係 兼任)
岡 雅彦・和田 恭幸	平成13年1月10日	岡 雅彦・和田 恭幸	福田 安典 (文献資料部助教授)
渡航先 目的	中国	渡航先 目的	愛媛大学教育学部助教授 (平成12年10月1日、平成13年3月31日)

平成13年度共同研究

増補本「和歌一字抄」の諸本整理とそのデータベース化

井上 宗雄（立教大学名誉教授）

妹尾 好信（広島大学助教授）

古瀬 雅義（安田女子大学助教授）

日比野浩信（愛知大学短期大学部講師）

蔵中さやか（神戸女学院大学講師）

中村 康夫（国文学研究資料館助教授）

汎諸本論構築のための基礎的研究

加藤 静子（都留文科大学教授）

松尾 華江（宇都宮大学教授）

美濃部重克（南山大学教授）

川平ひとし（跡見学園女子大学教授）

森 正人（熊本大学教授）

櫻井 陽子（熊本大学助教授）

田淵句美子（国文学研究資料館助教授）

河竹黙阿弥台帳の基礎的研究

原 道生（明治大学教授）

飯島 満（聖徳大学講師）

今岡謙太郎（早稲田大学講師）

岩井 眞實（福岡女学院大学助教授）

寺田 詩麻（早稲田大学助手）

安富 順（早稲田大学大学院生）

吉田 弥生（国立劇場調査養成部資料課）

山下 則子（国文学研究資料館助教授）

大名屋敷の饗宴の研究

—「弘前藩庁日記」を読む—

渡辺 憲司（立教大学教授）

文庫紹介 ③

名古屋市蓬左文庫

名古屋城の東方、旧尾張徳川家大曾根邸敷地内、徳川美術館に隣接して建つ蓬左文庫は、日本の書物文化を語る上で欠かせない、多様な蔵書を誇る。

徳川家康の蒐集した「駿河文庫」が、死後御三家に分与され（「駿河御譲本」、そのうち尾張家には約三千冊が譲られた。当主義直はこの前後から独自の集書活動を始め、一代で当時随一の大名家文庫「御文庫」を作り上げた。その後も二代光友以下歴代の藩主が蔵書の充実に意を用い、また一八世紀後半には「名古屋学」と称される、漢学・国学・本草学などが渾然一体となった独特の学問が開花し、彼らの著作や蔵書が収蔵されていた。維新後の混乱で約三分の一は流出したが、その後も徳川家は保存に努め、昭和に入って財団法人徳川黎明会を設立、東京目白において「蓬左文庫」として公開された。戦後文庫は名古屋市に移管

青木 直己（株）虎屋・虎屋文庫）
加賀 桂子
阪口 弘之（大阪市立大学教授）

林 公子（近畿大学講師）
大友 一雄（国文学研究資料館助教授）
武井 協三（国文学研究資料館教授）

され、現在に至っている（「古典の宝庫 蓬左文庫展」一九九五、名古屋博物館）を参照した。

室町時代の学問の有様を如実に伝える古写本や朝鮮本、義直の蒐集した明版など、漢学研究において重要な資料も数多いが、日本古典文学においても続日本紀・河内本源氏物語・四鏡・保元・平治・盛衰記など、影印や翻刻の対象となった重要な伝本がずらりと揃う。もちろん、藩政史や尾張の経済・社会・風俗を知る上での史料も、徳川林政史研究所と相補って充実している。

さらに戦後には、近世俗文芸研究の泰斗尾崎久弥旧蔵の近世小説類、和歌・短歌研究者雑賀重良旧蔵の近代文学関係書を中心としたコレクションなども寄贈され、蔵書の幅を広げている。後者は当館文献資料部近代部門において調査に着手している。

閲覧室には、駿河御譲本を中心

に、貴重書の写真本が備え付けられ、各種参考書、蓬左文庫本の影印・翻刻などとともに自由に手にとることができる。入口脇の展示室では、テーマを決めて常設展示が行われている。無料のPR誌「蓬左」（不定期刊）も充実した内容である。蔵書の内容は公開されている各種目録に詳しいので、御参照願いたい。

開館時間は9:30～17:00（書庫内資料出納停止12:00～13:00）、休館日は毎週月曜日、第3金曜日、祝日、特別整理期間、年末年始。所在地 四六一〇〇二三 名古屋市中区徳川町一〇〇一番地（徳川園内）、電話〇五二一九三五―二一七三、FAX〇五二一九三七―〇三五〇。交通はJR中央線大曾根駅下車徒歩一〇分、または市バス（基幹2番系統）・名鉄バス（本地ヶ原方面行）で名古屋駅・栄より「新出来」下車、徒歩五分。（研究情報部・堀川貴司）

平成13年度 春・夏季学会

①事務局 ②開催日 ③会場
(詳細は当館ホームページ参照)

- 楽劇学会 ①〒101-0051 千代田区神田神保町3-6 能楽昔林ビル内 03-5275-7767 ②6月10日 ③国立文楽劇場
- 訓点語学会 ①〒155-0032 世田谷区代沢1-20-10 fax 03-3487-4891 ②5月18日 ③京大会館
- 芸能史研究会 ①〒602-0855 京都市上京区河原町荒神口下る上生洲町221 キトウビル303号 075-251-2371
②6月3日 ③キャンパスプラザ京都
- 計量国語学会 ①〒167-8585 杉並区善福寺2 東京女子大学3号館3118号室内 03-3395-1211(代)
②9月29日 ③学術総合センター
- 国語学会 ①〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内 03-3812-2111 事務取扱 〒113-0033 文京区本郷1-13-7 日吉ハイツ404 03-5802-0615 ②5月19・20日 ③神戸松蔭女子学院大学
- 古事記学会 ①〒466-8666 名古屋市長和区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内 052-832-2151(代)
②6月9～11日 ③相愛女子短期大学
- 上代文学会 ①〒156-8550 世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学研究室内 03-5317-9706
②5月26～28日 ③大阪市立大学
- 昭和文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内 03-3295-1331 ②6月9日 ③日本女子大学
- 説話・伝承学会 ①〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1 花園大学丸山顕徳研究室内 075-811-5181(代)
②4月29・30日 ③奈良教育大学
- 説話文学会 ①〒343-8511 越谷市南荻島3337 文教大学文学部田口和夫研究室内 0489-74-8811(代)
②6月23～25日 ③同志社女子大学
- 全国大学国語教育学会 ①〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学発達科学部内 078-803-7718
②5月13・14日 ③大田区産業プラザ
- 全国大学国語国文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 (株)おうふう 気付 03-3294-0857
②6月2～4日 ③昭和女子大学
- 中古文学会 ①〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部国文学科研究室内 044-911-1230
②5月11～13日 ③専修大学神田校舎
- 中世文学会 ①〒305-8571 つくば市天王台1-1-1 筑波大学文芸・言語学系犬井研究室内 0298-53-4126
②5月26～28日 ③群馬県立女子大学
- 日本演劇学会 ①〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学文学部芸術学科演劇研究室内 fax 042-739-8092
②5月26・27日 ③桜美林大学
- 日本歌謡学会 ①〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学10号館904号宮岡研究室内 078-431-4341(代)
②5月26・27日 ③和洋女子大学
- 日本近世文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部原道生研究室内 03-3296-4545 fax 03-3296-4349 ②6月9・10日 ③中央大学多摩校舎
- 日本近代文学会 ①〒102-8357 千代田区三番町12 大妻女子大学文学部須田研究室内 03-5275-6074 事務取扱 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内 03-5814-5810
②5月26・27日 ③学習院大学
- 日本冒語学会 ①〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 075-415-3661 ②6月23・24日 ③一橋大学
- 日本口承文芸学会 ①〒150-8440 渋谷区東4-10-28 國學院大学文学部伝承文学研究室内 03-5466-0224
②6月2・3日 ③名古屋経済大学
- 日本語教育学会 ①〒101-0065 千代田区西神田2-4-1 東方学会新館 03-3262-4291
②5月26・27日 ③東京女子大学
- 日本国語教育学会 ①〒112-0012 文京区大塚3-29-1 日本教育研究連合会第3研究室内 03-3941-3420
②8月4・5日 ③文京区シビックホール・筑波大学附属小学校
- 日本社会文学会 ①〒102-8160 千代田区富士見2-17-1 法政大学80年館610 川村研究室 03-3264-9760
②6月9・10日 ③法政大学
- 日本比較文学会 ①〒565-0043 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内藤高研究室内 06-6850-6111(代)
②6月16・17日 ③早稲田大学
- 日本文学協会 ①〒170-0005 豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②7月1日 ③神戸大学
- 日本文学風土学会 ①〒102-8336 千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室 03-3261-7406
②6月16日 ③浦和市立コミュニティセンター
- 日本文芸研究会 ①〒980-8576 仙台市青葉区川内 東北大学文学部国文学研究室内 022-217-5957
②6月9・10日 ③東北大学
- 日本文体論学会 ①〒110-0004 台東区下谷1-5-34 三修社内 03-3842-1711 ②6月9・10日 ③日本大学理工学部
- 日本方言研究会 ①連絡先1 〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内 日本方言研究会幹事 0426-77-2135 連絡先2 〒115-8620 北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所気付 日本方言研究会幹事 03-5993-7630 ②5月18日 ③甲南大学
- 表現学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 03-3294-2174 ②6月2・3日 ③長崎外国語大学
- 仏教文学会 ①〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学石橋義秀研究室内 075-432-3131
②6月2・3日 ③大谷大学
- 美夫君志会 ①〒466-8666 名古屋市長和区八事本町101-2 中京大学文学部国文学研究室内 052-832-2151(代)
②6月30・7月1日 ③中京大学
- 和漢比較文学会 ①〒228-8533 相模原市文京2-1-1 相模女子大学国文学科矢作研究室内 042-742-1411
②9月22・23日 ③相模女子大学